

聖書：ヤコブ 5：7～11

説教題：主が戸口のところに

日時：2017年12月3日（朝拝）

この手紙の読者であるユダヤ人クリスチャンたちは苦しい状況にありました。1章1節に「国外に散っている12の部族へ」と語りかけられたように、彼らは迫害によって散らされ、試練の下にありました。そんな厳しい毎日の中で、ともすると彼らには信仰の歩みにおいて妥協する誘惑があったようです。特に金持ちたちを重んじ、彼らとの関係を大事にし、何とか自分も豊かな生活を！と願うことを信仰より大事にしていた。またその地域での地位を巡って互いに争っていた。そんな彼らに信仰に堅く立って歩むように！とヤコブは励ましのメッセージを送っています。前回の5章1～6節では金持ちたちへのさばきが宣告されました。ともするとこの地にやって来たクリスチャンたちは、この金持ちたちにあこがれ、この人たちを羨ましく思う状況がありました。しかしヤコブは金持ちたちについて、「あなたがたの上に迫って来る悲慘を思って泣き叫べ！」と言いました。どういうことだったでしょう。それは彼らの富はすでに腐り始めており、その金銀にはさびが来始めており、それはいつまでもあなたがたを守るものではないからということでした。また神から一時的にあずかっているに過ぎない財産を、みこころに従って用いずに、ひたすら自分中心に用いたことへの審判が下るということでした。ヤコブはこのことを踏まえて、今日の7節から「こういうわけですから」と信者たちへのメッセージを語って行きます。

まず彼が言っていること、それは「主が来られる時まで耐え忍びなさい」ということです。すなわち忍耐の歩みの奨励です。おそらく私たちは「忍耐」という言葉を好きではないと思います。忍耐はできればしたくない。忍耐せず、今すぐ祝福の生活をしたい。しかしヤコブはこの手紙で、忍耐こそ真の祝福に至る道だと語って来ました。冒頭の1章3～4節：「信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」これとは逆の忍耐しない人、すぐキレル人は幸いな人とは言えません。ローマ人への手紙5章4節で「忍耐が練られた品性を生み出し」と言われていますように、やはり忍耐というプロセスを経て、その人の品性は練られ、人格は磨かれ、霊的な成長と祝福が導かれて行くと言えます。この忍耐とは人間的な我慢のことではなく、信仰とセットの忍耐のことです。ここで耐え忍

びなさいと言われているのは高ぶる歩みの反対です。神の前にへりくだるから忍耐をする。その「信仰による忍耐」の歩みが奨励されています。

彼はその際の目標についても述べています。それは「主が来られる時まで」ということです。今の苦しい状態はいつまでも続くのではない。理不尽な世界は永遠に続くのではない。やがて主は来られて正しいさばきを行われます。そして待ち望む者たちを現在の苦境から救い出し、約束の祝福に入れてくださいます。ヤコブはこの勧めをするために一つのイメージを引き合いに出します。それは農夫の姿です。パレスチナでは秋の雨と春の雨が作物のためには欠かせないものだったようです。農夫たちは自分たちの力でこれをもたらすことはできません。できることはただ神の御手を待つことです。申命記 11 章 14 節：「わたしは季節にしたがって、あなたがたの地に雨、先の雨と後の雨を与えよう。あなたは、あなたの穀物と新しいぶどう酒と油を集めよう。」 農夫たちは自分たちの思うように雨が降らなくても、耐え忍んで待ちます。そしてついに受けます。そのようにあなたがたも耐え忍び、心を強くしなさいとヤコブは言うのです。

さらに 8 節後半では「主の来られるのが近いからです」と言います。これは前に出て来た「主が来られる時まで」という表現より、もっと強いものと言えます。先の言葉は主の再臨の日があるということを言っていますが、8 節の言葉はその日が近い！ということを行っているからです。ある人はこれを聞いて、そうは言ってももうそれから 2000 年も経過している。これでは「近い」というこの言葉をどのように我々は受け取ったら良いのか。ヤコブや新約聖書時代の人たちの予想は大きく外れたと言わざるを得ないのではないかと思います。しかし聖書から分かることは、当時の人々は自分たちの生きている時代に主の再臨が起こるかもしれないと待ち望みましたが、必ずしも自分たちの時代にそれが起こらなければならないとは考えていなかったということです。イエス様も「その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いも子も知りません」と言われました。ではこの「近い」という言葉はどういう意味で考えたら良いのでしょうか。神の計画という観点から見れば、約束のメシヤを遣わし、その方が地上でみわざを行ったら、もう世界は終わりの日に入ります。イエス様は地上の生涯を歩み抜き、十字架と復活を成し遂げて天に昇り、聖霊をその天から遣わされました。あと次に残されている神のプログラムは最後の主の再臨のみです。ですから今は終わりの日、あるいは終わりの時代と言われています。確かに神のあわれみによって、その日は延ばされていますが、それはいつでも来得るという意味でその日は近いのです。私たちが今生きている

時代が人類の歴史の中で最後になる可能性は大いにあります。そういう意味で主の日は本当に近いのです。この信仰のもとに耐え忍びなさいと言われていています。いつその日が来ても良いように、むしろ喜んでその日を迎えることができるように、その日を待ち望んでいる者として、その日が近いことを知っている者としてということです。

さてヤコブは9節でそんな彼らに「兄弟たち。互いにつぶやき合ってははいけません。」と言います。一見、別の話に話題が移り変わったかのようにも思えますが、そうではないようです。これはこの手紙の読者たちに実際に見られた姿だったようです。また私たちにも起こりやすいことと言えます。どういうことでしょうか。それは苦しい中にあると私たちは互いにつぶやくことをしやすいということです。ストレスやプレッシャーがあると、耐えられなくなって来る。その結果、私たちがしやすいのは、他人を批判すること。自分のイライラした気持ち、落ち着かない気持ちを誰かへの攻撃という形で処理しようとする。必ずしもそのからくりが自分の中で明確になっているわけではないのですが、他人の小さなことに目が行って、それを取り上げては、ぶつくさつぶやく。人の過ちを見つけては、それを見逃さずに指摘して、自分の中でのうっぷんを晴らす。そうして共同体の内側で互いに滅ぼし合うようなことをする。

自分を振り返ってみて、自分が苦しい時、どれだけ周りの親しい人また家族に欲求不満をぶつけて来たことでしょうか。そのつぶやきや批判は表面的には正しくても、実は探って行くと、自分の中のストレスが原因となっているということはないでしょうか。ヤコブは「兄弟たち。互いにつぶやき合ってははいけません。さばかれたいからです。」と言います。これはマタイの福音書7章1～5節のイエス様の言葉を思い起こさせます。そこでイエス様が語っておられるように、私たちは人の目の中のちりは良く見えます。そして言います。「あなたの目にはチリが入っていますよ！私は気になって気になって仕方がないから指摘してあげますよ。良ければ私に取らせてください。」　そう言ってデリケートな目の中に無造作に自分の手をグイッと突っ込む。しかしイエス様は言います。「見なさい。あなたの目には梁が入っているではありませんか！」と。人のことは指摘するが、自分も同じことをしていること、いやそれ以上の間違いを犯していることにはさっぱり思いが至らない。そのような人は自分が人をさばく厳しいレベルで自分自身もさばかれると言われていています。私たちは他の人の批判をしたり、他の人のしたことにつぶやく時、このことを良く考えなければならぬと思います。果たして自分はこれによって自分にさばきを招くことはないだろうか。私はまず自分の目から梁を取り

のけなさいと言われたイエス様の言葉を真剣に自分に当てはめているだろうか。私はただ自分のむしゃくしゃした気持ち、面白くない気持ちを、乱暴に兄弟にぶつけているだけと言うことはないだろうか。

ヤコブはここで「見なさい。さばきの主が戸口のところに立っておられます」と言います。先ほどの「主が来られるのが近い」という表現より、さらに強いものとなっています。戸口に立っているとは、今にもドアがあいて主が入って来られるかもしれないということです。あるいは主が復活後に弟子たちに現れたように、次の瞬間に私たちの間に立っておられるかもしれない。それでも私は大丈夫だろうか。慌てたり、すべてを見抜かれる主の前で恥じ入ることはないだろうか。主は扉一枚向こう側まですでに来ておられるという光の下で、私たちは自分の霊的状态と振る舞いを良く吟味し、整えなければならぬと言われているのです。

最後にヤコブは忍耐の歩みへの励ましとして模範について語ります。私たちは苦しい中にある時、自分のことばかりを考えやすいと思います。なぜ信仰を持ったのに私の生活はこんなことになっているのか。こんなに状態にあるのは私だけではないのか。私だけが例外的な人間なのではないかと。しかしヤコブは預言者たちもそうだった！と言います。旧約聖書を読むなら、預言者たちは皆そうだったことが分かります。エリヤはアハブ王によって苦しめられましたし、エレミヤは涙の預言者と言われた人ですし、イザヤは伝承によればのこぎりで二つに裂かれて殉教したという話は当時の人々の間で有名だったそうです（ヘブル書 11 章 37 節）。あるいはエゼキエル、ホセア、アモス等々。皆、苦難を強いられました。イエス様も山上の説教で、「義のために迫害されている者は幸いです」と語られたところで、「あなたがたより前にいた預言者たちも、そのように迫害されました」と言われました。しかし彼らは語ることをやめませんでした。なお忍耐して語り続けました。あの彼らを思い浮かべるように！とヤコブは言います。

そして 11 節でもう一人、ヨブの名を上げます。彼はどんな苦難を経験したでしょうか。ヨブ記を見ると分かりますように、彼はある時、7 人の息子と 3 人の娘を一瞬にして失いました。次には自分自身が足の裏から頭の頂まで、全身悪性の腫物で覆われ、土器のかけらで自分の体をかかなくてはならない状況に置かれました。それを見た彼の妻は「神を呪って死になさい。」と言いました。また友人たちも寄って来ては「何か悔い改めるべきことがあるのではないか。」と説教しました。確かにヨブは一切つぶやかな

かったわけではありませんでした。戦いがそこにはありました。しかし彼はその中で主への信仰を投げ捨てず、まさに忍耐に忍耐を重ねる歩みをしました。彼は子どもたちを失った時、「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」と言いました。また妻のあざけりに対しても、「あなたは愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、災いをも受けなければならないではないか。」と言いました。他に 13 章 15 節 16 節：「見よ。神が私を殺しても、私は神を待ち望み、なおも、私の道を神の前に主張しよう。神もまた、私の救いとなってくださる。神を敬わない者は、神の前に出ることができないからだ。」 16 章 19 節：「今でも天には、私の証人がおられます。私を保証してくださる方は高いところにおられます。」 19 章 25 節：「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。」

こうして苦しみを耐え忍んだ彼の結末はどうだったでしょう。ヨブ記最終章 42 章に記されていますように彼の所有物は 2 倍に増されました。彼の後の半生は前の半生よりももっと祝福されたと記されています。また息子 7 人、娘 3 人が与えられ、失ったものを取り戻すことができました。まさかの結末です。苦難の時からは到底考えられなかった祝福です。この結末に示されていることは何でしょうか。それは「主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです」とヤコブは述べます。つまり主はヨブの苦難の間、ずっとそこにとともにいたのです。事柄全体を支配し、そこに良い目的を持って働いておられたのです。そしてこの苦難を通して彼をきよめ、鍛え上げ、最後には考えても見なかった素晴らしい祝福へ導いてくださった。主はこういう方であることが、あのヨブの出来事には示されています。その慈愛に富み、あわれみに満ちた主が、あなたの苦しみの時にもともにいてくださり、すべてを導いてくださっており、最後にはご自身が計画した一番良い結末をあなたにもたらしてくださる。このような主を見上げて、耐え忍ぶ歩みをした人に用意されている祝福に入るように！とヤコブは励ましているのです。

2017 年もいよいよ最後の月に入りました。この年も早すでに 11 カ月の歩みが導かれました。私たちはこの年、ここまで「忍耐の歩み」を主にあって導かれて来たでしょうか。主のここまでの守りを振り返って、私たちはこの最後の月、主に感謝するとともに、同時に覚えるべきは主が来られる日はそれだけ近づいたということです。そのような時にあることを覚えて、一層忍耐する歩みへと私たちは導かれています。この年、ここまで苦しい一年を歩んで来た人もいるかもしれません。また今、その真っ只中にある方も

いらっしゃるかもしれません。しかし今日の御言葉から心に留めたいことは、私たちとともにいてくださる主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。私たちが経験する苦しみのすべてに意味と目的を持ち、そこから良いものを導き出すために働いてくださっている。そして耐え忍ぶ者に、ヨブのような結末を用意くださっている。この主がともにおられることを見上げて、なお耐え忍ぶ歩みを、今年最後のこの月も、また主の許しがあるなら新しい年も導かれないと思います。さばきの主はすでに戸口のところに立っておられます。いつの瞬間にでもさばきを行うため、この世界に臨み得る状態にあります。その主を見上げて、いつでも喜んで主をお迎えできる信仰の歩みへ、そして耐え忍ぶ者に用意されている素晴らしい結末に入れられる者の歩みへ進みたいと思います。